

研究主題 通常の学級での授業場面における教師の発話と児童の学習行動の関係

要約：本研究は、教師の授業における教授行動のうち発話の量（時間）と速度を低減させることが、児童にとっての授業に対する参加意欲を高める支援となるのではないかを明らかにしようとした。その結果、児童の日頃の学習状況や学力によっては、教師の発話量や速度の変化と関係がみられる場合があることがわかった。

キーワード：発話時間（量）、発話速度、児童の学習状況

I はじめに

筆者は、特別支援教育コーディネーターとして、通常の学級への支援に関わることが多い。その中で、特に高学年に学習への意欲があまり感じられない児童がいることへの気がかりを感じるようになった。学校生活の大半を占める授業時間に意欲を持っていない状況は、その他の時間にも影響を及ぼすのではないだろうか。授業における教師の教授行為の改善が授業改善となり、児童の学習意欲を高めることはできないだろうか。そこで、教師の発話改善を試み、教師の発話と児童の学習行動の関係を探ることにした。

本研究では、通常の学級での授業時における教師発話行為の内、発話の量（時間）と発話速度の変化が、子どもの学習行動に与える影響を明らかにする。併せて、教師の発話状況を授業者に伝えていくことで、発話を意識した授業改善を提案したい。

II 研究方法

1 対象

A 市 B 小学校 6 年生 25 名（内 24 名）、担任（授業者）C（30 代男性、教職年数 8 年目）

B 小学校は、人口 5 万人程度の県内では小規模な自治体の小学校で、学年 1 学級の単級である。授業者 C は、5 年時から持ち上がりの担任である。

2 方法

予備調査 1 として、児童の聴覚的言語理解の状況を把握するための児童自身と保護者へのアンケートを実施した。児童自身には、児童自身の聞こえに対する気づきを、以下の 3 項目についてわかりにくさの有無を尋ねた。[①話を聞いただけ、②新聞や本を読んで、③会話] 保護者には、[①会話中の聞き返し、質問をしても聞いていないと思われること、③騒がしいところで聞き取りにくいと思われること、④読むことと聞くことではどちらが理解しやすい様子か] について 4 件法で回答を求めた。保護者アンケートの記名は自由選択とした。

予備調査 2 として、児童の抽象語理解力の状況を知るために、以下の調査を行った。

- ・聴覚的言語理解に関するアンケート
- ・抽象語理解力の状況調査（SCTAW）

これらの結果を受け 2 名の対象児を抽出し、2013 年 6 月から 2014 年 1 月に行われた国語科 10 時限算数科 5 時限の授業についてビデオ分析を行った。2014 年 2 月に、再度児童の抽象語理解力状況の調査と児童へのアンケート、担任及び関係教職員へのアンケートと聞き取りを行った。

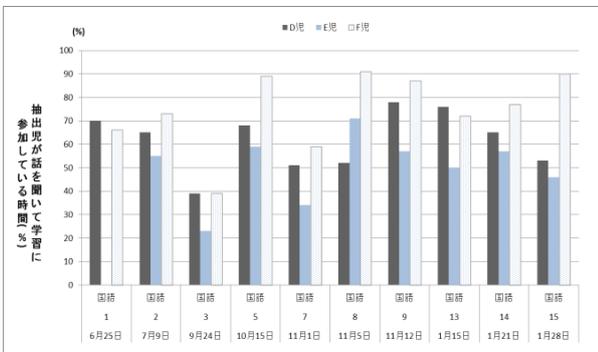
III 結果

1 教師の発話と児童の学習行動の関係

(1) 発話時間（量）と発話速度との関係

教師の発話時間（量）と発話速度を変化させる試みは、大きな変化が見られなかった。特に発話時間（量）は、授業の形態による差が大きいことがわかった。発話速度は、時間の経過に従ってわずかながら抑えられるようになった。発話速度は、教師の意識や話す内容、伝える相手によっても変化することがわかった。教科の違いによる差異は見られなかったため、児童自身の好き嫌いなどの影響が少ないと考えられる国語科において、抽出児が教師の発話を聞いて学習に参加している時間の割合を数値化した。

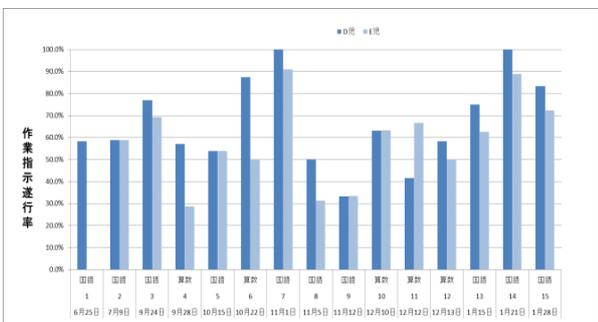
【図 1】



(2) 教師の指示的発話と児童の反応の関係

教師の指示的発話に対して、児童が作業的な指示を遂行できたかどうかの割合を【図 2】に示す。抽出児 2 名は作業指示を常に自分で判断して取り組んでいるわけではないが、比較するために対象とした F 児は、すべての作業指示に対して作業を遂行できていた。

【図 2】



IV 考察

1 教育現場に示唆できること

1) 教師と児童の関係が学習意欲に

関わる可能性

本研究では、児童の学習参加状況を、教師の発話中に児童が顔を上げて話を聞いている時間として測定し、児童の意欲的な参加状態と想定した。教師の発話は、児童に対して語りかけられ、児童が理解できるようなものでなければならない。D 児のように顔を上げている時間は短く、話を聞いていないように見えるが、実際には聞いているという児童も少なからず存在する。特に、特別な支援を要する児童に、その傾向がみられる。聞いているように見えないために、教師や友達に指摘を受けることが多くなり、自己肯定感が下がってしまった児童に、筆者自身何度か出会ってきた。そのために、教師への反抗的な態度をとったり、拒否的な態度をとっているように思われる児童もいた。教師は児童一人ひとりと丁寧に関わり、よい関係を作っていく必要がある。

2) 特別な支援を必要とする児童との関係

授業での発話に関して、その改善は言われるが、具体的な提案は少ない。本研究では、発話速度と発話時間（量）から児童の学習行動を検討したが、その結果、日頃の学習状況や学力との関係を見出すことになった。それは、学力の高い児童には、教師の発話の速度や量はあまり影響せず、学力のあまり高くない児童には、影響がみられたということである。学力の低い児童に対して、学習状況を改善する支援として、個別指導や支援を行うことを求められるが、これは学級担任にとって負担が少なくない。本研究で抽出した E 児は、学力があまり高くなく個別の支援を要する場面が多い。E 児が 80%以上の作業遂行を行えた授業は、授業者 C の平均発話速度に比べて、発話速度が遅かった。数値で示すと発話速度 5.3~5.4 (字/s) での指示遂行率が比較的よくなっている。反対に 20~30%の作業遂行率だった授業は、教師の発話速度が速く、発話時間が長いという傾向が見られた。このことから、個別の支援を要する児童にとって、教師が自身の発話速度や発話時間（量）を変えることが、一つの支援になると考えられる。

児童が学びやすい環境を保障するために、聴くことの強みを生かした支援として、或いは聴くことの困難さを軽減する支援として、教師が発話を意識することは有効である。発話には、発話速度や発話時間（量）以外に、イントネーションや大きさ、内容等様々なものがあり、一概には言えないが、教師が授業を見直し、発話を意識的に変化させることが、特別な教育的支援を要する児童の学習を支える可能性があるといえるだろう。

2. 教師の発話に関する提案

教師の授業場面での発話を速度と時間（量）から検討した。授業者 C の 1 授業あたりの発話時間（量）の割合は 34.7% であり、平均発話速度は 5.8 字/s であった。45 分間の授業時間中 15~16 分となる。その発話自体が、繰り返しの多いものや、聞き取りにくいものであれば、児童の学習に影響が出てきよう。15 分という時間も、児童の発言時間や思考時間、ノート記入の時間などを確保することを保障しようとするれば、より短くすることを検討しなくてはならない。そのためには、教材研究による発話内容の選択、用いることばの精選・吟味、授業構成の工夫が必要である。

予備調査として、児童の抽象語理解力検査を実施した。児童の語彙力をみることで、教師が用いる語彙との差を確認しようとした。同時に誤答の傾向を見ていくことで、語彙だけでなく、児童の音関連刺激の入力状況も把握できた。学級の 15% 程度の児童が 2 月時点でも該当学年の平均正答率に到達しておらず、2 学年程度低い学年に相当する児童も見られた。この 15% 程度の児童が存在することを念頭においたことばの使用が求められる。対象学級では、見たり読んだりした方がわかりやすいと感じている児童に音関連刺激の誤答が見られ、聞いた方が理解しやすいと感じている児童には、音関連刺激の誤答がみられなかった。このことから、語彙の習得に際し、音声言語中心の授業や生活では、

聴覚からの情報入力の人差が関係していることが考えられる。授業が児童の言語発達に関係するという点からも、補完のための視覚的な提示などを工夫するとともに、音声言語そのものの提示にも工夫や配慮が必要となる。そこで、本研究から見えてきた教師の発話改善の可能性について述べる。

1) 発話時間（量）に関わって

発話時間（量）そのものを変化させるためには、①授業形態を変える、②発話内容・ことばの精選、③補助的な教具の使用、④授業形態のパターン化が考えられる。これらは特別な教育的支援を必要とする児童にとっても、安心して学習に臨める支援となるだろう。通常よく用いられている手立てだが、教師の発話を少なくするという観点からも、有効な支援ではないだろうか。

2) 発話速度に関わって

発話速度は、教師自身が意識するだけでも変えられることがわかったが、教師の発話速度と児童の学習行動との関係が明確にできたとは言い難い。しかし、抽出児童の学習参加のようすから、教師の発話速度が比較的遅い授業では、作業指示に対する反応がよい授業が見受けられた。何をすればよいかを理解しやすくなったということを示していると考えられる。では、発話速度を変えるために、どのような手立てが考えられるであろうか。目標とする発話速度を音声で提示する方法も先行研究では見られたが、実際の授業場面では難しい。教師自身が意識し続けるために、文字で書いたメモなどを手元に置くという試みが実際的な方法であろう。授業者 C は事後の聞き取りで、低学年など年齢の低い相手に話すときに自然に話す速度が遅くなることや、本研究に関わり始めてから、自身の話す速度を意識するようになったと述べている。自分の話したことが聴き手に伝わっていくかどうかを考えながら、ことばを発するようになっていたということである。このことはコミュニケーションにおいて欠かすことのできない感覚である。とかく授業者は、教えなければならないと

いう思いにとらわれてしまうと、相手に伝わっているかどうかよりも伝えたかどうか、自分は伝えたはずだという思いになりやすい。自分自身のことばが、聴き手に伝わっているかどうかを児童の学習行動から、確かめながら話すという感覚を持ち、発話速度を意識する、意識し続けることが、発話速度を調整する手立てとなり、聴き手への支援になるであろう。

3) 授業改善と発話

教師の発話から、音声言語を検討した。その結果、音声言語の様々な要素が、聴き手に様々な影響を与えているということがわかった。イントネーションや抑揚の違いをつけられることが、授業を音声言語で行うことの利点である。文字言語では伝わりきれない情報が、音声言語を用いることで的確に伝えられるならば、それを有効に活用していくことが、教師が授業を行う際の強みともなろう。しかし、それが学習者の「聴く」意欲を高めるものとならない場合は、授業を損なうことにもなりかねない。

一般に授業力、指導力といわれるが、それらを構成しているものは多様である。音声言語を用いた教師の発話は、教授技術のひとつにすぎない。しかし、教授技術であると同時に、対人関係を支えるコミュニケーションツールでもある。本研究では、このような働きを成す教師の発話を改善する視点として、音声言語の特性や発話時間（量）、発話速度を考えてきた。教師の発話改善だけで授業力・指導力が高まるというものではないが、授業をコミュニケーションという側面から捉え、教師の発話から作られる授業を見直していくことが、授業改善の方法の一つだと考える。授業時間が児童にとって充実したものとなれば、通常の学級において学びにくさを感じる児童が少なくなり、特別な教育的支援の必要な児童も満足感・達成感を感じられるのではないだろうか。インクルーシブ教育が指向される現在、特別な教育的支援を必要とする児童や、障害のある児童が安心して学べる環境が、通常の学級における授業場面に保障され

ていくことになると考えられる。そのためにも、教師は、自分の発話を日々意識しながら授業を行うことが必要となろう。

V 課題

学習者自身からの情報や、学習者についての情報をより多く、適時に得ておくことが必要であった。児童個々がどのように感じていたのか、学習内容を理解することができていたかなど、児童自身が感じていたこととビデオ分析との擦り合わせが十分できていない。

また、教師の発話が児童の学習行動の意欲に影響するという予測を十分に検証できる方法がとられたとはいえない。発話内容によって、発話の時間（量）や速度に違いが出ていることも考えられる。教師の発話を、多様な観点で分析することが必要であろう。

VI まとめにかえて

今回、教師の発話に焦点を当てた研究を進めていく中で筆者にとって求めていきたい授業像が明らかになった。最近の児童の様子から、考えることを避けたり、すぐ諦めてしまう姿が気になっていた。思考が短絡的であったり、自分中心であったり、幼さを感じるものが少なくない。通常の学級では、その授業像が、あまりに成果発表型になっていたのではないだろうか。じっくりと考え、多様な視点で物事を見つめたような、日常生活では当然の経験が学習とつながるといった展開は少なく、狭い範囲の中でいかに合理的にねらいを達成するかが重要視されているように思われる。子どもたちには豊かな素材と広い視野をもって自分の可能性を探ってほしい。そのために、授業という環境の中でじっくりと考え、人と付き合う作法をも身に着けてほしい。これは、通常の学級のみならず、私が担当する特別支援学級においても変わらない。この2年間で学んだことを、今後の教師生活に生かしていきたい。